

歌人としてだけの一生を評価されるのは、茂吉の本意ではあるまい。

著者は、愛情をこめて、精神病医として生きた斎藤茂吉の生涯をつづっている。

それだけでなく、この本は「斎藤茂吉という人を切り口としての、精神科医療史の一断面となるだろう」と著者が序文でのべている通り、茂吉が精神病医であった時代（一九一一年、明治四十四年から一九四五年、昭和二十年）の日本の精神科医療を、なまなましくつづっている。

この時代の日本の精神病医のあり様を、まとめて残しているものは、かれの日記、書簡、手紙、歌においては、いまやなくなっている。

著者は、原資料にもとづいて、彼の生涯にせまっていると同時に、彼と関連している精神病医を、たんねんに拾いあげて、略伝のように記載している。巻末の人名索引を活用することにより、この当時の精神科医療史を研究するものにとつて、必携のものとなるだろう。

「日本の現代精神科医療史をかくことをこころざしている」という著者にとって、この本は絶対に必要な一里塚である。

著者による日本の現代精神科医療史の完成が、すみやかであることを願わずにはいられない。

（小峯 和茂）

〔思文閣出版、京都市左京区田中関田町二一七、電話〇七五五—七五一—一七八一、平成十二年十一月九日、A五判、三三

六頁、本体価格三〇〇円〕

山崎 光夫 著

『日本の名薬』

誰にでもひとつふたつは「飲みなれた薬」や「家族の誰かが飲んでいた薬」というものがある。特に日本には長く大衆薬の歴史があつて、医者にはかからないで「買ってきた薬」でなんとか治してしまう人も少なからずあり、その人の数だけ「名薬」があると行うこともできるだろう。

本書は一見古い薬袋のような装丁で、そのページをめくれば、百早丸、赤玉はら薬、喜谷実母散、宇津救命丸などよく知った名前前の薬が登場する。最近では雑誌やテレビでも伝統的な薬が取り上げられる機会が多いが、本書は薬の効能については科学的な裏付けを示し、その一方で薬舖や薬にまつわる人物や地域の歴史を丁寧にもといている。また、単に昔を懐かしむのではなく、ワシントン条約以降の生薬の入手問題や後継者難、病める現代人と薬の関係など、「現在」という視点を常に持ちつつ、伝統的な薬をめぐる諸相を描写している。著者はあとがきでも書かれているように、かつては雑誌記者として専門医を訪ね、現在は医学関係の著作を発表されており、長年にわたって医薬の現在を見聞してきた積み重ねが本書に活かされているといえよう。

医薬史については本学会を初め、最近では若い研究者も増

えつつあり、その成果は着実に積み重ねられてきている。しかし医薬史の分野は歴史を扱いながらも、医学・薬学という高度な学問と関連があるがために、世間では間口が狭い、あるいは敷居が高いとみなされている。一旦踏み入れればあれもこれも調べてみたいという、実に豊かな世界であるにもかかわらず、である。私の勤務する内藤記念くすり博物館でも、開館以来、なんとか医薬史に身近なレベルで接することはできないか、苦心を重ねてきている。ところが来館者の中には、「医薬」というだけで身構えてしまう方も多く、展示室を見て初めて、「富山の薬売りさんほうちに来ていた」とか「この薬はおばあちゃんが使っていた」とうちとけてくださるのである。

また、アメリカでは教科書に薬の使い方の項目があるが、日本では医薬について学校で習うことはほとんどなく、親の見よう見まねに負うところが大きい。家庭医学の本にも一般的な薬の使い方しか書かれていないため、自分や家族の使っている薬が、なぜ効果があるのかとか、どんな歴史を持った薬なのか、全く知らないまま用いている人も多い。

本書は、このような現代にあつて、伝統的で、なおかつ現在も愛用されている「名薬」を題材に取り上げること、薬について知る楽しさを紹介してくれた、ということができよう。しかも一般の読者には間口を広く取り、専門家には奥行きを広く、と実に行き届いた構成である。奇しくも故・宗田一先生のご著書と同じタイトルとなったが、「日本の名薬」を

知り、調べ、伝えていくことは、あたかもリレーのような作業であると思われた次第である。

なお、著書は、「まえがき」でも述べているように、伝統薬やその製法などを「文化遺産」と呼び、更に調査続行中である。井上目洗薬など、多くの伝統薬が消えつつある現在にあつて、次回作でも、伝統薬の存在意義を問い、示すものであつてほしいものである。

(青木 允夫)

〔東洋経済新報社、東京都中央区日本橋本石町一―一―、電話〇三―三二四六―五六一―、平成十二年十月十二日、A五判 二九三頁、本体価格一五〇〇円〕

D・フロリー、V・ラッド 著

『アーユルヴェーダのハーブ医学』

本書はデイヴィッド・フロリー氏とヴァサント・ラッド氏の共著の翻訳に上馬場和夫が現代医学の立場から活性成分とその作用及び現在報告されている副作用とつけ加えた形で構成されている。全体の構成は前半の一章から九章までがアーユルヴェーダの基礎理論、後半の九章までがアーユルヴェーダの基礎理論、後半の九章がハーブの各論となっているが、各論では一般的ハーブ二種とアーユルヴェーダの特徴的ハーブ三種に分けられ効能及び用法が紹介されている。一般的なハーブではアロエ、カモミール、カルダモンなどごく